TSUNAGU

［繋ぐ］

Vol. 59
2024 SUMMER

究める Special Issue:

日常にある物語を描く 太田隆司さんの半立体絵画

先どる 環境保全と社会福祉に貢献する
紙製のカプセルトイ「ペパポン」

特別企画 紙と歩んだ100年を振り返る
「KPP 100 Years History」

究める 究極を超えた“紙”技術
「Paper Master Story」

日常にある物語を描く 太田隆司さんの半立体絵画

緻密に計算された構図に基づき切り抜いた紙を幾重にも組み合わせ、街の風景や人々の振る舞いをリアルに描き出した造形作品。質感や色の異なる紙でつくられるこの半立体絵画には、切り取った風景を再現した緻密な美しさだけでなく、表情豊かな人々が織りなす日常の小さなドラマがあります。人の心の奥にある感情を揺らす作品に隠された魅力について、作者である太田隆司さんの言葉からひも解きます。

「池袋東口 ～SEIBU department store～」
タテ350mm×ヨコ500mm×奥行き350mm

TSUNAGU

TSUNAGU 2024 Summer

KPPグループホールディングスが発行するTSUNAGU（繋ぐ）は“紙の魅力再発見”をテーマに、紙と文化・紙と事業・紙と人を「繋ぐ」広報誌です。

究める …… P01
日常にある物語を描く
太田隆司さんの半立体絵画

深める …… P06
KPPグループの最新ニュースを
キャッチアップ

先どる …… P07
環境保全と社会福祉に貢献する
紙製のカプセルトイ「ペパポン」

伝える …… P09
文壇の重鎮がしたためた
長男に宛てた生前の遺書

拓く …… P11
持続可能な社会の実現に向けて
ISCC PLUS認証を取得

特別企画 …… P13
紙と歩んだ100年を振り返る
「KPP 100 Years History」

訪ねる …… P15
新たなコミュニケーションを生み出す
注目のブックカフェにフォーカス

作る …… 付録
小物収納付き
「エトワール凱旋門」のオブジェ

「Rail & Road
時代を超えて〜清瀬駅 開業100周年〜」

タテ400mm×ヨコ900mm×奥行き400mm

西武池袋線の前身である武蔵野鉄道の駅として大正13年6月11日に開業した「清瀬駅」。その100周年を祝う記念事業として、地元出身の太田さんが制作した清瀬駅をモチーフにした作品。駅西側にある線路とストリートが交わる踏切から駅舎を見た構図には、清瀬に暮らす人々や犬、クルマや鉄道車両など、過去と現代が交じり合いながら時空を超えて混在する。

INFORMATION

太田さんの作品展示、トークイベントのほか、清瀬駅に関連するさまざまな企画イベントが予定されています。

清瀬市郷土博物館特別展
「清瀬駅100年の物語
駅とともに歩んだマチ 清瀬」

会場: 清瀬市郷土博物館（東京都清瀬市上清戸2-6-41）
会期: 開催中〜9月1日（日）
※月曜休館、月曜が祝日の場合は火曜休館
入場: 9:00〜17:00　※最終入場は16:30

太田隆司氏トークイベント

日時: 8月17日（土）　13:30〜15:00
場所: 清瀬市郷土博物館 映像展示室
応募: 電話または
インターネット申し込みフォームより応募

右:戦後活躍していた三輪自動車は、現代の自転車に乗る住民と差別化するためにモノクロで作成。
左:人物の顔パーツは、切り込みを引き出したり押し込んだりすることで微妙な表情をつくり出している。

右:突然走り出した柴犬の躍動感や嬉しそうな表情まで見事に表現。飼い主の服のシワや帽子を押さえる仕草など細部までつくり込むことで、リアリティのあるワンシーンに仕上がっている。
左:西武鉄道の歴代車両が停車するホーム。線路に敷き詰められた砕石にはコルクを使用。

作品を通して、その場所の魅力をより多くの人に届けたい。

私たちの暮らしの中にある身近なシーンを切り取り、そこで語らう人物や愛くるしい表情の犬、光沢までリアルに表現したクルマなどを登場させることで、味わい深い物語を紡ぎ出す。ペーパーアーティストの第一人者として活躍する太田隆司さんの作品には、リアルな描写を超える驚きと楽しさ、人間味のあるユーモアが詰まっています。

太田さんがペーパーアートの制作を始めたのは、日本大学藝術学部を卒業して数年後のこと。精密な描写を得意としていた太田さんは、オリジナリティのある表現を模索するなかで、線画に沿ってカッティングした紙を何層にも重ねて奥行きを表現する、新しい技法に行きついたそうです。「幼い頃から絵を描くのが好きでしたが、リアルな写実だけでは生き残れない。そんな思いから、紙を重ね、湾曲させることで陰影をつくり出す技法を思いつきました」。

そんな太田さんが大きな転機を迎えたのは1995年のこと。自動車専門誌『CAR GRAPHIC』での連載が決まり、毎月新作を制作する多忙な日々がスタートします。「読者は無類のクルマ好きだし、ディテールや表現にこだわる方が多いので細かいご指摘をいただくこともありましたが、愛のあるねぎらいの言葉として受け取っていました（笑）。26年間続いた連載をきっかけに、たくさんの方に知っていただく機会になりました」（太田さん）。毎月、誌面上で発表される新作は話題を呼び、翌年には初の個展を開催。その後、各メディアでも大きく紹介されたことで、企業や全国の自治体、美術館などから制作依頼が殺到するようになったそうです。

太田さんの作品の真骨頂は、質感の異なる何十種類もの紙を使い分け、情景そのものをリアルに表現していること。エンボスの細かさや模様、紙の風合い、色のトーンを考慮したうえで最適な紙を選び、建物であれば木材やレンガ、鉄骨や石材など、人物であればジャケット、ニット、ジーンズなど、すべて異なる質感の紙を組み合わせることで独自の世界観をつくり出しています。「これまで、あらゆる種類の紙を試してきました。切り絵とはまた違う精密さと、視覚から伝わるぬくもりやニュアンスは、紙だから表現できるもの」と太田さん。観る人の心に響く太田さんの作品には、長年にわたってさまざまな紙を洞察し、紙の本質を追究してきた背景があります。

昨年、日本が誇るペーパーアートの魅力を世界に発信することを目的に、クラウドファンディングで資金を募り、ニューヨークの路上でギャラリー展示を行うなど、

作品制作の様子

❶デザインカッターを使い、型紙からパーツを切り出す。　❷千枚通しを使ってパーツに丸みをつける。❸切り出したパーツを仮置きし、色の組み合わせなどバランスを確認する。　❹質感ごとにまとめられた材料となる紙のストック。

「舞い上がれ GINZA SKY」

タテ350mm×ヨコ600mm×奥行き300mm

「未来に笑みを ～2021グランエミオ所沢～」

タテ350mm×ヨコ600mm×奥行き350mm

「眠れる森の美女 ～Sleeping Beauty～」

タテ350mm×ヨコ450mm×奥行き300mm

ペーパーアーティスト

太田 隆司さん

1964年、東京都清瀬市に生まれ、日本大学藝術学部美術学科卒業。1995年に自動車専門誌「CAR GRAPHIC」で「PAPER MUSEUM」の連載を開始。2002年テレビ東京の「TVチャンピオン」ペーパークラフト王選手権で優勝。ほか受賞歴多数。「神の手●ニッポン展」への出品や、全国の美術館、博物館等で多くの個展を開催する。ドラマのオープニングタイトルバック制作や商品プロモーションの提案など、多方面で活躍中。

Instagram　facebook

精力的に挑戦を続ける太田さん。「これからは、SNS上に動画をアップロードするなどして"伝えること"をテーマに自ら作品を発信していきたいですね。僕の作品を通してその場所の魅力や歴史を知ってもらうきっかけにしてもらいたいと思っています。身近なところでいえば、生まれ育った清瀬をはじめ、出身大学のある江古田や始点となる池袋など、沿線にある各駅の作品をつくることで、地域の魅力を伝える貢献ができたらうれしいですね」と太田さんは語ります。名声を得た現在も、なお新たな挑戦を続ける太田さんの今後にご注目ください。

深める

KPPグループの最新ニュースをキャッチアップ
「KPP GROUP HEADLINE」

KPPグループ 創立100周年記念サイトを公開しました

創立100周年記念サイト
https://100th.kpp-gr.com/

2024年11月27日に迎える創立100周年記念日に先駆け、100周年記念サイトを公開しました。本サイトは、周年事業の情報発信ハブとしての役割を持つとともに、ステークホルダーのみなさまへ感謝の気持ちをお伝えすることを主な目的としています。本ページでは、本サイトの見どころをご紹介します。

左上:C.W.ニコル アファンの森財団の「アファンの森」
右上:「かみのいと OJO+」製人工芝
左下:紙製緩衝材「Fillpak TT」
右下:紙製フェイスカバー

HISTORY

■歴史

当社の100年の足跡とともに、紙パルプ業界の変遷を当時の貴重な写真とともにご紹介しています。PC版では、KPPグループと紙パルプ業界のトピックスを左右に並べて表示。スマホ版では、カテゴリーをアイコンで表記し、ひとつの時系列に組み込んだ形式でご覧いただけます。

PHILOSOPHY

■理念体系

当社グループの理念体系を表す「KPPグループウェイ」や長期経営ビジョン「GIFT+1 2024」の概要、100周年ロゴについてご紹介しています。また、グループ全体で掲げるミッション、ビジョン、バリューなどの理念についてまとめた「ブランドブック」をデジタルブック形式でご覧いただけます。

PRODUCTS & SERVICE

■メイン事業と近年の取り組み

当社グループのメイン事業と近年の取り組みについて、6つの区分に分けてご紹介しています。特に⑥近年の取り組みでは、グループ各社が開発した製品の一例を新たに撮り下ろした画像とともに紹介しています。

①ペーパー&ボード事業
②パッケージ事業
③ビジュアルコミュニケーション事業
④製紙原料(パルプ・古紙)事業
⑤環境関連事業
⑥近年の取り組み

EVENT

■イベント

100周年記念に関連するイベント情報を掲載しています。現在企画中のイベントも多数あり、今後も詳細が決まり次第追加・更新してまいります。

環境保全と社会福祉に貢献する紙製のカプセルトイ「ペパポン」

硬貨を入れてレバーをひねると商品が出てくるカプセルトイ。何が出てくるかというドキドキ感と、目当ての商品が出てきた時の高揚感は、子どもから大人まで大人気のアミューズメントです。昨今、脱炭素社会の実現に向けて社会全体が動き出すなか、ついに紙製のカプセルトイ「ペパポン」が登場しました。その魅力を探るために、企画・開発・販売を手掛ける株式会社ペパポンの横田敬之社長と青山満さんのお二人にお話を伺いました。

PEPAPON
株式会社ペパポン

かぶしきがいしゃぺぱぽん〇段ボール製カプセルトイ「ペパポン」の企画・運営・販売を事業として2022年に創業。SDGsで社会貢献・環境貢献につながるプロダクツを次々開発し、各メディアの注目を集めている。

――商品の開発にいたるまでの経緯を教えてください。

当社では、販売チャネルのひとつとして電子部品をカプセルトイにして販売していたのですが、中身を取り出して空になったカプセルがその場に放置されてしまうことが問題でした。ゴミ回収の手間や近隣店舗への迷惑を減らすため、カプセルを持ち帰ってもらう方法を模索するなか、カプセルを段ボール製にすることを思いつきました。もともとお付き合いのあった段ボール加工会社さんに相談し、試作品をつくり設置したところ、放置されるカプセルがほぼなくなったので商品化を進めることにしました。段ボールの回収率は約95%とリサイクルに優れる素材なので、SDGsに貢献したいという私たちの考えと合致したことも、商品化を推進した理由です。

――商品開発で特に苦労したことは?

平らな段ボールシートが素材なので、球体に近づけるためにはたくさんの「面」が必要となりますが、面が増えると容器としての強度が弱くなってしまいます。できるだけ面の数を減らして強度を出し、円滑に転がる球体に近づけること、また組み立ての難易度を下げるなど試行錯誤を重ねた結果、最適なカタチとして斜方立方八面体にたどり着きました。もともとある多面体の一種ですが、上下に分割できる設計はペパポンのオリジナル(意匠登録済)です。

右:東京ラジオデパート(東京都千代田区外神田1-10-11)に常設されているペパポンのカプセルトイコーナー。左:就労継続支援事業所でのペパポンの組み立て風景。現在、20の事業所がペパポンの製造に携わっている。

――カプセルはどのように製造していますか?

就労継続支援B型事業所を利用する障がいのある方や、一般企業への就職が難しい方にカプセルの製造をお願いしていることもペパポンの大きな特徴です。ペパポンの売り上げの一部が事業所の収益や利用者さんの工賃となり、それが福祉支援の一助になれば、という思いがあります。ペパポンのカプセルは一つひとつ手作業で組み立てるため時間と手間がかかりますが、完成形や用途が見えているため利用者さんたちのやりがいになっているほか、商品が劣化する心配がないため、時間があるときにできる仕事として、事業所の方々も重宝していると伺っております。また、カプセルの中に入れるお菓子なども自分たちの手でつくり、販売するなど地産地消のような取り組みも広がりつつあります。ペパポンを通して利用者さんの自立支援に役立てていただくことをめざしています。

――ペパポンはどのようなシーンで活用されていますか?

環境保全やSDGsをテーマにした自治体イベントなどにご活用いただくケースが多いです。テレビ局主催のお子さま向けイベントでは、SDGsについて学ぶとカプセルトイを1回回せるルールにして、キーホルダーなどをプレゼントする企画にご活用いただきました。

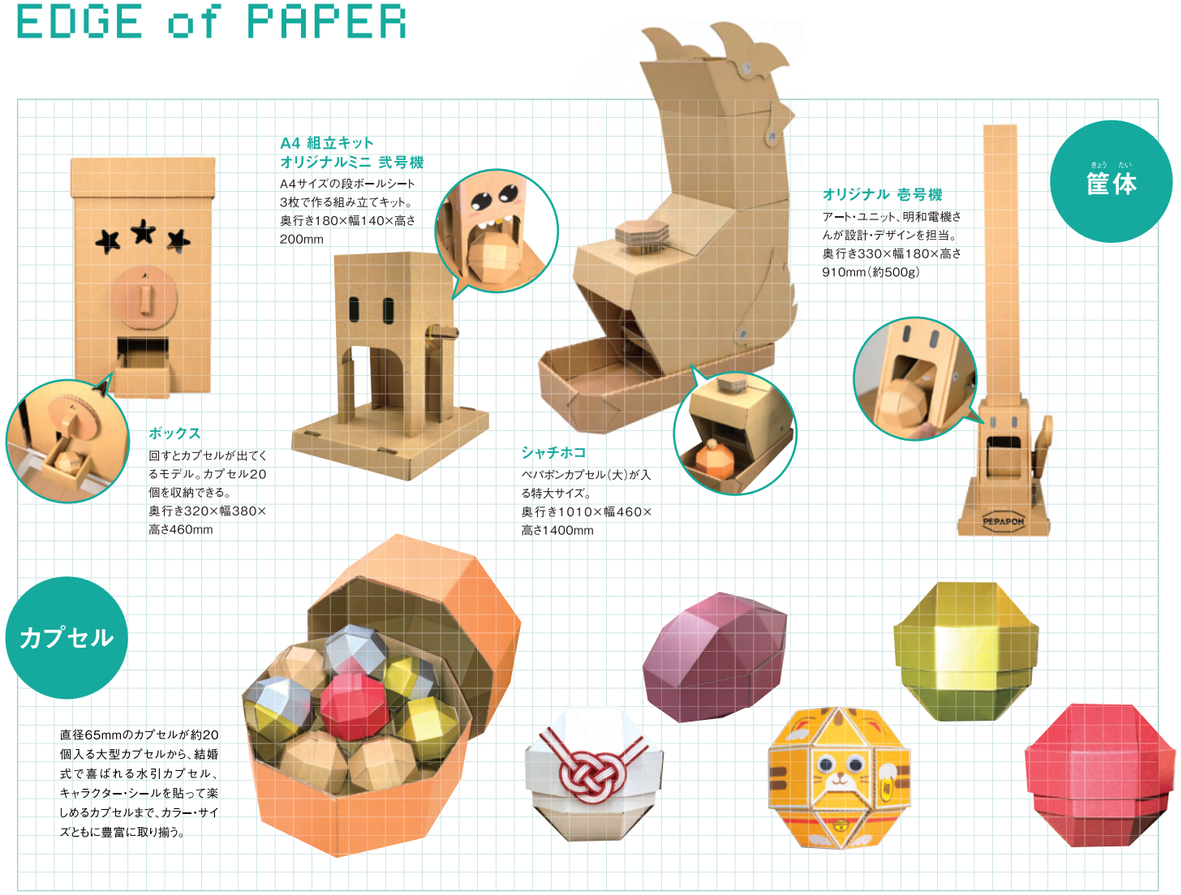
――カプセルの中身として、何を販売されていますか?

ケースだけでなく、中身もSDGsにつながるものを提供しています。たとえば牛や豚と比べて温室効果ガスの排出量が少ないコオロギ食も人気アイテムのひとつです。そのほか、スプラウトの有機種子の栽培キットなども販売しています。

――最後に、今後の展望をお聞かせください。

当社ではカプセルと併せて段ボールでつくった大小さまざまな筐体をつくっていますが、剣を刺したらカプセルが飛び出すもの、福引き機やメリーゴーランドをモチーフにしたものなど、驚きと楽しさのある新製品をつくっていきたいと思っています。段ボール製カプセルは、プラスチック製よりもコストがかかりますが、資源としてほぼリサイクルできるものなので、大量生産・大量消費を繰り返してきた時代に替わり、環境負荷が少なく、社会貢献につながるものづくりを続けていきたいと思っています。

EDGE of PAPER



株式会社ペパポン

住所　:東京都千代田区外神田2丁目12-6 ホリイビル3F
公式サイト:https://pepapon.com/
instagram:https://www.instagram.com/pepapon_ig/
メール　contact@pepapon.com

公式サイト　Instagram

INFORMATION

出展イベント
「第60回 JAPAN DIY HOMECENTER SHOW 2024」
日時:8/29(木)〜31(土) 9:30〜17:00(最終日は〜16:00)
会場:幕張メッセ(千葉県)
「第66回大阪インターナショナル・ギフト・ショー2024」
日時:9/12(木)・13(金) 10:00〜18:00(最終日は〜17:00)
会場:OMM2階展示ホール(大阪府)

集客、OEM商品として注目

ペパポンのカプセルトイはイベントでの集客力が高く、全国の自治体や教育機関が主催するイベントでも数多く導入されています。SDGsや環境、町おこしをテーマにしたイベントやものづくり体験などでの活用はもちろん、印刷できる段ボールの特性を生かしたOEM商品にも最適です。

子どもの自由研究にも最適!人気のスプラウト栽培キット

カプセルの中に、スプラウトの種子と土が入った「たねポン」は人気のアイテム。耐油紙と土がセットされていて、カプセルをプランターとして活用できるため、水があれば発芽野菜を栽培できます。現在、水族館で導入されているほか、ホームセンターで発売されており、夏休みの自由研究のテーマとして子どもたちに人気のキットです。

「手紙」は語る

人間は表現する動物だというが、
手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。
手紙は手書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第三十七回　菊池寛（後編）

植村鞆音

サラリーマンを定年退職して著述業を目指したわたしの最初の著作は伯父・直木三十五の評伝だったが、四十三歳で早逝した直木の晩年の十余年間は菊池寛との関係を語ることだったといっても過言ではない。大正九年、直木が企画した大阪での「文藝講演会」での出会いが二人の関係を深いものにした。一方が短躯の常識人、一方が長身の非常識人。外見も性格も才能もまるで違う二人が意気投合するのだから人生というのは分からない。三年後の大正十二年、菊池は自費で「文藝春秋」を創刊するが、その一月号から直木は雑文を継続して寄稿し、それ以外にも、匿名で文壇人を肴に辛辣なゴシップ記事を執筆する。これが人気を呼んで「文藝春秋」は発行部数を大幅に伸ばす。直木はユニークなアイデアを思いつき、菊池はそれを次から次へと実現していった。よほど相性がよかったのだろう。二人はパノール号ロードスターという車（フォード製らしい）を共同で所有し、文士や社員のたまり場である「文藝春秋社倶楽部」を菊池と直木と直木の愛人・香西織恵、三人の名前で木挽町に持つ。同誌のゴシップ記事「文壇諸家価値調査表」で「資産」が「二十八万円」の菊池に「負債」の直木がイーブンで経費を割り勘にできたわけがない。菊池が承知のうえで直木の分まで負担したのだろうと推測する。

菊池は文壇の一方の領袖として、売れない作家の面倒をよくみた。ポケットから無造作に皺くちゃの紙幣をとり出して与えたというが、実はポケットの中で勘定していたという説もある。たぶん、だからこそ作家でありながら優れた経営者でもありえたのだろう。

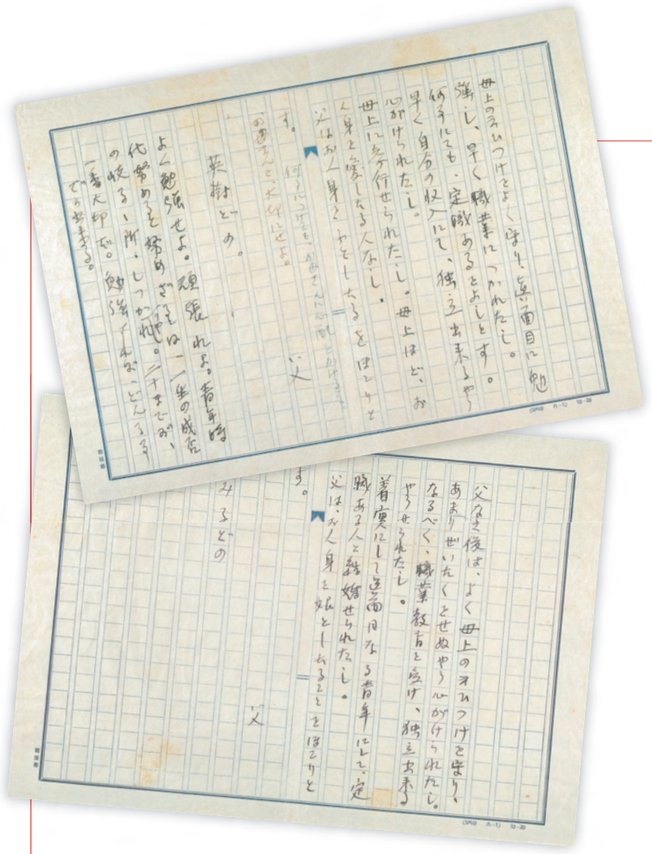
もう一つ。わたしは、菊池さんの偉さに「偉大な常識人」をあげたいと思う。なんのパーティーの折だったか、土産に菊池さんの長男と長女に宛てた遺書のコピーを頂戴したことがあった。「文藝春秋」の解説によれば、菊池は若いころから心臓が悪く発作を怖れていた。最初の発作に苦しんだのは大正末年のことで、その数年後の昭和四、五年頃、万一のことを考えて書いた遺書のようだ。長男・英樹宛の遺書。

「母上の云ひつけをよく守り、真面目に勉強し、早く職業につかれたし。何事にても、定職あるをよしとす。早く自分の収入にて、独立出来るやう心がけられたし。母上に孝行せられたし。母上ほど、おん身を愛したる人なし。父はおん身を子としたるをほこりとす。何事につけても、お母さんに心配をかけるな。お母さんを大切にせよ。英樹どの。父」

函底に納められた二通の手紙は、昭和二十三年菊池が亡くなったあと家族により発見された。長女・瑠美子宛のものも同主旨である。「勉強せよ、定職につけ、母親の言いつけを守れ」といっている。わたしなどはどうしても余計なことを書いてしまいそうだが、単純で率直で菊池さんらしいと思う。父親の心情を感情移入せずごく当たり前に伝えている。書き手が偉大な常識人である所以である。

菊池と直木の友情については書きたいことが山ほどある。二人の女性関係などもおもしろいが、紙数の関係で割愛せざるを得ない。直木は昭和九年二月二十四日、帝大医院で脊椎カリエスと脳膜炎のため四十三歳の若さで壮絶な死を遂げるが、前年の暮、横浜富岡に生涯で唯一の家を新築する。借金と執筆と病苦に追われる直木が、終の住処として建てたものだが、人里離れて一人で暮らせばやはり寂しい。直木は木挽町の文藝春秋倶楽部へと戻っていく。しかし、直木の病気は当時不治の病とされた結核である。病気の進行とともに客足も遠ざかっていく。そんな中で、いままで通り倶楽部に顔を出し続けたのは菊池であった。寂しがり屋の直木を少しでも励ましたいという思いやりからである。菊池は、新聞小説を書くという口実で、ほとんど毎晩倶楽部に顔を出した。原稿を執筆する前後、菊池と直木はテーブルを挟んで座っていたが、ほとんど言葉は交わさなかった。芸術論や世間話などは一切しなかった。そこで、手持無沙汰だから「碁を打とう」ということになった。菊池の「碁の手直り表」は、昭和九年二月十一日から直木が帝大医院に入院する二月九日までの約一カ月間の二人の倶楽部での十三回の対局を、直木の死の直後、菊池が「文藝春秋」四月号で回想した哀惜の情溢れる追悼文である。囲碁は、菊池より直木のほうがいくらか強く、最初のうちは直木が菊池に三目置かせて六連勝する。だが、四目になった直後、直木の形勢有利に見えた碁を作ってみると意外にも菊池の一目勝ちだった。その後、直木の碁は粗雑になって、菊池が四連勝し三目に戻ってもさらに菊池が三連勝する。入院する九日が最後の対局だったが、直木の碁はまるでバラバラだった。直木にはすでに脳膜炎の兆候が出ていたのである。菊池は大勝するが「ちっともうれしくなかった」と書いている。敗戦後、直木は車を呼び一人で帝大医院に向かった。

九日から二十四日までの死に至る鬼気迫る闘病ぶりも、残念ながら語るスペースがない。入院生活はすべて、菊池の命で「文藝春秋」が仕切った。通夜は木挽町文藝春秋社倶楽部、葬儀は内幸町の文藝春秋社で社葬。葬儀委員長は菊池寛である。死の直前、直木が心を砕いた連載小説のいくつかは友人たちによって書き継がれた。「主婦の友」の「女心双情記」は菊池が完成させた。さらに菊池は、直木の富岡の家をいったん自分で買い取り、借金の始末をつけたうえで遺族たちが住めるように手配し、死の翌昭和十年には多摩霊園に直木の記念碑を建立し、いまに残る「直木賞」を創設している。



著者略歴
植村鞆音（うえむらともね）　エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、(株)テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2005年『直木三十五伝』で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年『歴史の教師植村清二』で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の岬』『気骨の人 城山三郎』など。

菊池寛（きくちかん）

小説家・戯曲家・実業家
1888-1948

1888年、香川県高松市生まれ。京都大学卒業後、時事新報社の社会部記者として勤める傍ら、短編小説『恩讐の彼方に』などを発表して、新進作家としての地位を確立した。1923年文藝春秋社を創設し『文藝春秋』を創刊。日本文藝家協会を組織し、1936年に初代会長に就任。大映の初代社長も務めた。代表作に小説『忠直卿行状記』『真珠夫人』などがある。1935年、芥川龍之介、直木三十五の業績を記念して、芥川龍之介賞、直木三十五賞を創設。本名は菊池寛（きくちひろし）。

持続可能な社会実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーを循環・再生させることは、現代社会において極めて重要な課題となっています。当社グループの使命である「循環型社会の実現に貢献する」に基づき、事業を通してサステナブルな社会づくりに貢献し、企業価値の向上を図っています。

当社グループ会社の国際紙パルプ商事が ISCC PLUS認証（国際持続可能性カーボン認証）を取得

国際紙パルプ商事は、今後のさらなる脱プラ・減プラのニーズに沿うことを目的として、今年4月に持続可能な製品に関する国際的な認証の一つである「ISCC PLUS認証（国際持続可能性カーボン認証）」を取得しました。

「ISCC PLUS」とは、企業が扱うバイオマス由来の製品が、原料の調達から製造プロセス、出荷までのサプライチェーンの各段階において、適切に管理されていることを証明する国際的な認証です。本認証の取得をもって、東京本社、関西支店（大阪市）、および中部支店（名古屋市）で、2024年3月からマスバランス方式※によるバイオマス由来特性を割り当てた食品用フィルムなどのISCC PLUS認証製品の販売が可能となりました。

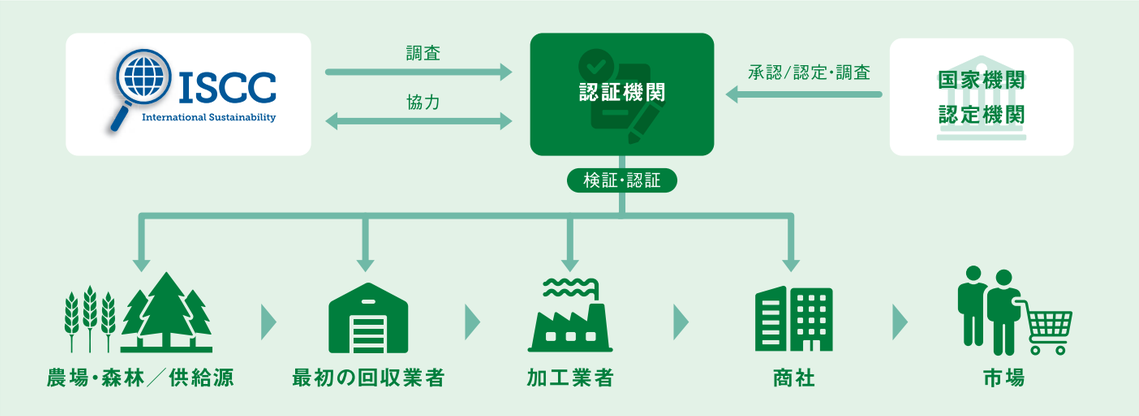
当社グループでは、2050年までに事業を通して排出されるCO_2の量を差し引きゼロにする「2050ネットゼロ」を目標に掲げています。国際紙パルプ商事のISCC PLUS認証取得により、規格に準拠したバイオマス製品の取り扱いを拡大し、環境負荷低減に向けてさらなる取り組みを進めていきます。

※原料から製品への加工・流通工程において、ある特性を持った原料（例:バイオマス由来原料）がそうでない原料（例:石油由来原料）と混合される場合に、その特性を持った原料の投入量に応じて、製品の一部に対してその特性の割り当てを行う手法（環境省「バイオプラスチック導入ロードマップ」より）

■ISCCとは?

ISCCは、「**I**nternational **S**ustainability & **C**arbon **C**ertification」の略で、持続可能な原料（再生原料・バイオマス原料）と製品を対象とする国際的な認証制度。リサイクル原料やバイオマス原料などが、製品製造を含むサプライチェーン上で適切に管理されていることを担保するもので、EU地域のみを対象とする「ISCC EU」と、EU地域以外も取得可能な「ISCC PLUS」の2種類がある。

■ISCC認証の流れ



■本件に関するお問い合わせ
国際紙パルプ商事株式会社 サステナビリティ推進室
MAIL kpp_sustainability@kpp-gr.com

■KPPのプラスチックフリーに向けた取り組みはコーポレートサイト内「GREEN KPP」ページからもご覧いただけます。
https://www.kpp-gr.com/kpp/ja/green_kpp/greenkpp.html

農産物の生産・販売を行う新会社を設立

国際紙パルプ商事は、「総合循環型ビジネスモデル」の一環として、イネ科の穀物「ソルガム（写真）」を中心とした農産物の生産および販売を行う新会社「KPP アグリソリューションズ株式会社」を設立しました。同社は、農林中央金庫の支援の下、髙橋将志氏、恵比寿建設株式会社との共同出資によって設立された合弁会社です。

日本国内では、農業従事者の高齢化や後継者不足が慢性化するなど、さまざまな問題が山積しています。同社では、農産物の収穫や耕起などの農作業を請負う受託組織（コントラクター）としての活動だけでなく、原子力発電所事故の影響により農産物生産の中止を余儀なくされた福島県浜通り地域の営農再開に取り組むことで、同地域の復興支援に貢献していきます。また、将来的に生産した農産物を再生可能エネルギーであるバイオ燃料として活用することも視野に、販路開拓を行っていきます。

これらの事業を通じて、同地域における新たな産業の創出および農業振興に貢献し、日本全土を取り巻く農畜産業の課題解決およびカーボンニュートラルな社会の実現を推進していきます。

イネ科の穀物「ソルガム」

KPP アグリソリューションズ株式会社	
所在地	福島県双葉郡浪江町 権現堂字町頭 5-2
代表者	代表取締役社長 宮田 淳史
事業内容	農産物・畜産物・家畜飼料・バイオマス燃料・堆肥の生産、加工及び販売並びにこれらの斡旋に関する事業 農作業の受託事業、生産物及び車両等の輸送事業、労働者派遣に関する事業、農福連携を推進する事業 等

紙と歩んだ百年を振り返る

PART.2
1961-1985

KPPグループ創立100周年を記念した特別企画として、全4回にわたり100年によぶ発展の歴史をご紹介します。それぞれの時代に起きた社会の出来事やトピックス、紙・パルプ業界の動きも含めて、紙と歩み続けてきたKPPグループの足跡を辿ってみてください。

1960s

社会のニュース／トピックス

1964
- 東京オリンピック開催（日本の金メダル16個）
- 東海道新幹線開通

1966
- ザ・ビートルズが来日（日本武道館公演）

写真:毎日新聞社/アフロ

1968
- 川端康成さんがノーベル文学賞受賞
- 週刊少年ジャンプ創刊

1969
- アポロ11号が人類初の月面着陸に成功

KPPの歩み

1968
- 本店を東京に移転（大阪本店を支店、東京支店を本店とする）

東京本社

1965年当時の業務風景

紙・パルプ業界の動き

1964
- 東洋パルプがチップ専用船を就航する

1968
- 田子ノ浦港にてヘドロ公害問題が発生

写真:富士市所蔵

1970s

1970
- 日本万国博覧会開幕（大阪・吹田）

写真:毎日新聞社/アフロ

1971
- 初の海外現地法人を豪州に設立（現地法人豪州大同設立）

当時の会議の様子

1972
- 沖縄本土復帰

1973
- 第一次オイルショック

1974
- 長嶋茂雄さん（巨人）が現役引退

1973
- 王子連合通商と合併、大永紙通商株式会社へ商号変更
- 製紙原料分野に進出（資本金8億円）

1975
- オイルショック後の不況を打破するため大成紙業と合併
- 経営基盤の強化を図る（資本金13億2,000万円）

1976
- 現地法人香港大永設立

1980s

1980
- 1980年3月期に売上高2,000億円超となる

1982
- 現地法人米国大永設立

1983
- 東京ディズニーランド開園（千葉・浦安）

1985
- 科学万博開幕（茨城・筑波）

1978
- 第二次オイルショック
- 超高層ビル「サンシャイン60」が開館

写真:毎日新聞社/アフロ

1985
- 紙・板紙の年間生産量が2,000万トンを超える（2,047万トン）

1970
- 日本の紙生産量が世界第2位となる（1,297万トン）

編集後記

階段を上り、エレベーターに乗って、辿り着いた高い場所から景色を見渡すとき、行きかう人々やそびえ立つ建物がすべてミニチュアに見え、ジオラマのように眼下に広がるというのはあまりに身近で記憶にも残らない日常のワンシーンかもしれません。その景色は読者のみなさまの生活圏によって百人百様ですが、今号の特集で紹介している太田隆司さんのペーパークラフト（P1～）で表された風景は「どこかで見たことがあるような気がする」というようなデジャヴかつ郷愁の一コマの連続ではないでしょうか。一般的な鉄道の模型にあるようなジオラマには無機質な印象を持ちますが、太田さんの作品からは見知らぬ土地のはずなのに温かみを感じられます。その理由を考えると、すべてが紙で出来ているから。という端的な感想が浮かびましたが、ご本人にうかがうと「目から伝わる紙の質感と色」が受け手に親しみを与えているからではないかということでした。よく見ると、人物の手足は紙が丸められふっくらとした質感に、着ている服には皺がより生活感が現れ、今にも話し出しそうな曲面が切り取られています。一方、建物は直線的なパーツでありながら、幾重に紙が重ねられていることから、不思議と立体的な世界にいざなわれる。そんな細かな描写を紙面を通してお届けできたらと思います。本誌のテーマは「紙の魅力再発見」。紙から生まれたどこか懐かしき風景が、夏の雲とともにあたたかく明るく広がります。

（加藤智香）

KPP Group 100th Anniversary Information

SDGs達成に向けた環境イベント「リラックマ×スポGOMI」を開催予定

周年記念事業の一環として、ゴミ拾いに“スポーツの楽しさ”を融合させる「スポGOMI」と、国民的キャラクター「リラックマ」がコラボした「リラックマ×スポGOMI」を開催します。国際紙パルプ商事の本社・支店がある6都市を舞台に、すべてのステークホルダーが「楽しみながら社会貢献活動」をすることができるイベントです。詳細は8月上旬に当社の周年記念サイトにてご案内いたします。どうぞお楽しみに。

NEW STYLE BOOKSTORE -Vol.15-

noma books（のま ぶっくす）

千葉県習志野市大久保3-11-19 大和屋ビル2F
TEL:047-409-3710
営業時間:9:00～20:00（19:30ラストオーダー）
定休日:なし
Instagram ID:noma_books

暮らしの“行間”を豊かにする、地域に根差した街の本屋さん

千葉県習志野市のほぼ中央に位置する大久保エリア。京成大久保駅から北へ約600メートル延びる賑やかな商店街の一角に、この「noma books」はあります。中小企業の経営支援ビジネスに従事する馬渡あかねさんが書店経営をスタートしたのは2022年のこと。この商店街で100年近く続いてきた書店が閉店することになり、前オーナーが引き継ぎ先を募集。たくさんの応募者から馬渡さんが選ばれ、書店経営をはじめたそうです。「前のオーナーさんは、学生街に本屋がないのは良くないから、と高齢になるまで経営を続けてきた。私もその思いをつなぎたいと思いました。儲けよりも長く続けられるビジネスとして本屋をはじめようと決断をしました」。

店内の棚を見渡すと、文芸書、ビジネス書から絵本、マンガ、雑誌まで、幅広いジャンルの本が表紙を見せるように陳列されています。「ネット通販で本を買う場合は、指名買いしたタイトルと同じ著者の作品や関連本ばかりで、他ジャンルの本に目が向きません。その点、実店舗にはさまざまな分野の本があるので、たまたま目に入った本を手に取り、中身を確認することもできる。それまで興味がなかった類の本と出会うチャンスがあることも、街の本屋ならではの魅力だと思います。立ち読みを禁止している書店もありますが、うちではじっくりと中身を確認していただけるように、椅子やソファ席をご用意しています」と馬渡さんは話します。

「誰かにとっての大切な場所・時間になればという思いを込めて、[～の間＝noma]を店名にした」という馬渡さん。曜日・時間を問わず幅広い世代の方々が気軽に立ち寄るnoma booksは、なくてはならない街の本屋としてこれからも愛され続けるはずです。

「街の本屋さんにあるべき本をきちんとそろえておきたいと思っています」と話すオーナーの馬渡さん。

KPPグループホールディングス株式会社
KPP GROUP HOLDINGS CO., LTD.
発行：グループ人事本部 グループコーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044　東京都中央区明石町6番24号
TEL（03）3542-4166（代）
https://www.kpp-gr.com/
TSUNAGU公式インスタグラム
ID：kpp.tsunagu
ぜひフォローをお願いいたします!

RICE INK
輸送マイレージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。
Eco・Press Binder
針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

「TSUNAGU」Vol. 59 使用紙：ミューマット（127.9g/㎡/北越コーポレーション株式会社）しなやかなボリューム感と滑らかな面感。乾燥性と印刷作業適性に優れたマットコート紙です。